随筆 筆者の見方・考え方の読み取り

冬の林の最も大きな愉しみのひとつは、裸になった梢の姿を眺めることである。真冬の小さな固い芽は、萎縮して堪えているのでは決してなく、エネルギーの凝縮するさまであり、その不可思議な木の息が林全体に生気を与える。同じように葉はなくても、枯れた林と、生きている林の違いは余りにも大きい。

昔から画家たちは、じっと自然を見つめ続けて、梅は梅の枝、桜は桜の枝振りを画布にのせて来た。脇芽の出方、一本の枝の反り具合、枝と枝との間隔、それぞれに梅には梅の、桜には桜の性格がある。

ミツマタはその名の示す通り、枝分かれは常に三つの岐に分かれることを繰り返して伸びる。しかし、どのミツマタも決して同じミツマタではなく、一本一本が微妙に異なるその姿が、機械では造れない造化の神の妖しい業、自然の樹の姿である。

クヌギにしても、ナラにしても、林には一本として全く同じ枝の繰り返しはない。しかも、それぞれの枝の伸び方は、気ままのようでいて、結果としてはクヌギにはクヌギ、ナラにはナラの枝振りがある。

人の姿もまた同じようなものであろうか。それぞれに自己主張を続け、個性を誇ったところで、人には人の姿がある。また、どんな制服を着せて、同じ教育をしたところで、一人として全く同じ人間というものは出来上がらない。

植木屋がいかに梅を松のように剪定しても、梅は梅にしか育たないが、同時に、一本として同じ梅の木はない。

（大庭みな子「木の姿」による）

筆者の見方・考え方と主題

随筆に表れる筆者特有の見方や考え方を捉えると、**主題**が読み取りやすくなる。

①文章の題や、繰り返し使われる語句などに注目し、**話題**を読み取る。

②話題に対する**筆者の意見・感想**を読み取る。

③**筆者特有の思い・考え**を捉える。

※特に、表現技法や印象的な描写が使われている箇所、筆者特有の視点が表れている箇所に注目する。

例題

本文中から、次の内容が中心的に書かれている段落を探し、その最初の五字を答えなさい。

木々の姿をもとに考えた、人のあり方。

[　　　　　]

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中で描かれているクヌギやナラのあり方について、次のAとBは、人のどのようなあり方と対応しているか。適当なものをそれぞれ選びなさい。

A　クヌギもナラも、一本として全く同じ枝の繰り返しはない。
B　クヌギにはクヌギ、ナラにはナラの枝振りがある。

ア　どんなに個性があるといっても、人には人の姿がある。
イ　同じ教育をしても、一人として全く同じ人間とはならない。

A［　　］　B［　　］

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　木は、同じ種であればどんな環境でも同じ姿になるので、木と人では個性のあり方が根本的に異なる。
イ　木は、その種に特有の姿がありながらも一本として同じものがなく、人の姿に通じるものがある。
ウ　木は、どのように育てられるかによって姿が異なるので、梅が松のような枝振りに育つこともある。

［　　］